

第84回日本皮膚科学会東京支部 学術大会を開催して

(2020年11月21・22日、完全Web形式で開催)

佐藤 伸一

東京大学大学院医学系研究科皮膚科学教授

はじめに

このたび、2020年11月21・22日の2日にわたり、第84回日本皮膚科学会東京支部学術大会を開催させていただきました。6月の日本皮膚科学会総会は完全Web形式で開催され、予想よりスムーズに進行了たことを確認することができましたので、東京という三密が極めておこりやすい環境を勘案し、安全を最優先して東京支部も完全Web開催といたしました。お陰様をもちまして2,224名の方にご参

加いただき、この場をお借りして御礼申し上げます。

学会のテーマについて

皮膚科は、単に皮膚病変だけを対象とするのではなく、皮膚に病変を有する疾患そのものを扱う診療科と考えております。このような観点から、皮膚科には他の診療科とオーバーラップする領域が当然ながら派生してきます。とくに、膠原病はその代表です。今後皮膚科医は専門領域を積極的に拡大することこそが、その存在価値を高め、また皮膚科医の役割を国民にアピールできる重要な戦略となると考えています。したがって、他の診療科とオーバーラップする領域に対しても、積極的にリーダーシップをとっていくことがこれからの皮膚科には求められます。このような視点から、今回の学術大会のテーマは「新たな皮膚科学の可能性を求めて」といたしました。

シンポジウム

「強皮症治療のハードルをクリアーする」

このテーマの一環として、東北大学の相場節也教授から、「強皮症をみたことがない皮膚科医でも、強皮症を診察することができるような企画をつくってはどうか」とのご提案をいただきましたので、「強皮症のハードルをクリアーする」というタイトルのシンポジウムを開催しました。通常のシンポジウムとは異なり、具体的な検査方法や治療について、わかりやすく解説していただきました。これによって強皮症を専門としない医療機関でも、強皮症診療を始めてみる先生が増えることを願っております。



図1 本大会のポスター

特別講演

招待講演として、強皮症研究の第一人者のノースウェスタン大学リウマチ学のJohn Varga教授、特別講演として癌の起源について遺伝子の観点から解析し、大きな功績をあげられてきた京都大学腫瘍生物学の小川誠司教授、そして皮膚科からは小麦アレルギーの領域で大きな足跡を残された島根大学の森田栄伸教授にお願いしました。どの特別講演もたいへん素晴らしく感銘を受けました。この特別講演で取り上げました膠原病、悪性腫瘍、アレルギーは他の診療科との境界領域に当たる領域ですので、そのような領域の新しい情報をお届けできたのではないかと考えております。

教育講演とアジア諸国との交流

境界領域のみならず、皮膚科医にとっては境界領域でない皮膚疾患についても、広くかつ深く学ぶ必要があることはいうまでもありません。その観点から、尋常性疣贅、真菌症、皮膚外科手術、ダーモスコピー、薬疹、水疱症、白斑、脱毛症などの教育講演や、皮疹からみる皮膚病理、小児における皮

膚疾患などのシンポジウムも充実させましたので、参加される方の多様なニーズにもお応えできたものと考えております。

また、急速なグローバル化に伴い、アジア諸国との交流はますます重要となってきています。本大会でも、ソウル国立大学皮膚科のJin Ho Chung教授、国立台湾大学皮膚科のChia-Yu Chu教授を特別講演でお呼びしました。お二人とも素晴らしい講演をしていただき、このような企画を通じて、アジア諸国とよりいっそう緊密な交流を図れればと願っております。

おわりに

本学術大会はコロナウイルス感染症の影響で、対面での開催はできず大変残念でした。しかし、Web開催ということで参加が容易になったというメリットもあったと思います。Web開催は案外容易であり、主催校の負担は大幅に軽減されるのですが、やはり対面でないことは味気ないと感じざるをえない一面もありました。本会開催が今後のWeb開催について少しでもご参考になればと願っております。